

巻 頭 言

知の流通・消費の歴史という視点で（学術）出版を考えると、現在はどのような時代なのか。本誌のような大学の紀要や学会誌は綴じられた雑誌や書籍として発行され、各地の大学図書館に送られ、所蔵される。しかしながら、現在多くの研究者が知の成果にふれるのは、図書館にある紙雑誌よりも諸大学のレポジトリや有料のデータベースを用いた PDF 形式のデータによると思われる。知の流通・消費は既にデジタル化されている。

知の産出のインフラストラクチャーに焦点を移すと、綴じた紙の雑誌オリジナルとしない、オンラインのみ出版の国際学術誌も現れている。カナダの SSHRC (Social Science and Humanities Research Council) は、学術誌への出版助成時には即時のオンライン発行を求めており、結果として紙版を廃止してオンライン版のみになった学術誌もある。ピアレビュー、ブラインドレビューと呼ばれる査読システムが知の門番ならば、紙の本や雑誌であろうと、0と1のデータであろうと、論文の質は担保され、内容面の心配はない。

流通・消費の変容と知の産出のインフラストラクチャーのデジタル化を対比すると、2020年の時点では綴じた本や雑誌の形式を前提して、論文という形の知が産出されていることは非常に興味深い。紙の（学術）雑誌とタブレットで見る（学術）雑誌は、現在は同じページ立てをとる。ともすればこの状態は、綴じた雑誌に出版された論文が主であり、それを移し替えているオンライン版は従属的な扱いであるようにも見える。オンライン出版は、本や雑誌を別メディアに移す「翻訳」であり、オリジナルはどこか別のメディアにあると研究者のコミュニティは推定しているようである。

「メディアはメッセージである」は、カナダのメディア史家マーシャル・マクルーハンの有名な主張だが、形式が内容のある程度規定することは否定できないだろう。オンライン出版の隆盛は、論文を拡張・補完する新たな知の表現形式につながるのだろうか？ パソコンに向かってデジタルデータでこの文を書きつつ、新たな知の表現形式を想像すると、期待と少しの不安がある。時代の変化に対してこのような思いを抱きつつも、形式に載せる内容を産出する「研究」という行為が、基本的には、手間はかかるけれど楽しい行為であることは変わることがないだろう。時間を見つけて研究を進めて成果を発表してくれた作者の方々、編集業務に関わられたの方々、英語コミュニケーション学科の諸教育・研究活動について報告をまとめてくれた方々に、この場を借りて感謝の念をお伝えしたい。(小西)